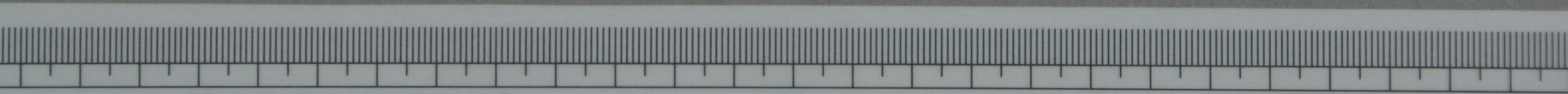




季寄
 鮮
 改正月令博物全
 三夏部
 四

= 5
 529
 8



10

15

20

25

30

5
529

夏部目錄



夏部目錄
△印夏三月
夏の天氣。占候。養生法等。九ノ出

夏時令

此部ハ夏三月ノ
時侯ノりりし

△夏日

三ノ

△夏月

夏の霜
三ノ

△夏暁

三ノ

△夏朝

三ノ

△夏夕

三ノ

△夏夜

三ノ

△夏山

三ノ

△夏野

三ノ

△夏川

三ノ

△暑

△涼

夏州木

此部ハ夏三月ノ
州木ノりりし

△夏草

三ノ

△夏木

三ノ

△夏柳

三ノ

△夏神

三ノ

△青茶椒

三ノ

△柚山椒

三ノ

60 65 70 75 80 85 90 95

△薊葱 七十一 △馬齒莧 七十二

△苜蓿 七十二 △落 七十二

△蓼 七十二 △藜 七十二

△根芋 七十二 △蓴菜 七十二

△海松 八十一 △水草の花 八十一

夏生類

此部は夏三月より夏
季のついでにのりあつた

△蚊 八十一 △蚊遣火 八十一

△蚊柱 九十一 △蟻 九十一

△蛭 九十一 △蚤 九十一

△螢 九十一 △子子子 九十一

△蝸牛 十 十 十 △蛤蜊 十 十 十

△夏鷹 十四 △鷹鳥屋筆 十四

△鵲 十五 △蟬虎 十五

△蠅 十五 △鵜川 十五

△青鷺 十六 △通鴨 十六

△鯉 十六 △胡鱈 十六

△水鯰 十六 △水鯉 十六

△干鯉 十六 △干鰻 十六

△洗鱸 十六 △鱖 十六

△鯨 十六 △蟹 十六

△鹽鳥賊 十六 △魚菜 十六

夏雜 此部は夏三月の種々
乃雜事をあつた

△短夜 十六 △蚊帳 十六

△扇 十六 △團扇 十六

△日傘 十六 △編笠 十六

△夏断 十六 △夏経 十六

△安居 十六 △夏書 十六

△新麥 十九 △切麥 十九

煮冷汁 煮汁 麥飯 麦飯

麥粉 麦粉 木布 木布

草物 草物 汗衫 汗衫

汗巾 汗巾 汗手拭 汗手拭

必用 此部より夏三ヶ月の入用のこと

夏養生 夏養生 夏天氣 夏天氣

夏風 夏風 夏雲 夏雲

夏霞 夏霞

夏時令 此部より夏三ヶ月の候の時侯の物とある

夏日 夫木 為家

九天鑪焰暖 避暑得深幽

六月玉聲寒 忘年遂久留

夢晝淹々 奥フカキ殿院ハ各別

花約為送香来自捲簾 ヨ

深院塵消散 干炎篆烟如

埃玉消散 テ暑

氣盛 ヲ忘ル

ノ句 ヒヲ送リテ自ラ簾ヲ捲

クタ メニ吹タルヤウニ

オモ ハルナナリ

詩 夏日之詞 明 黃氏

夏月

夏の霜もつり
新古今 頼政

庭の面もまごかかぬふ夕ぐらりの
そとをけりくすめる月う那

夫木

為相

結出づ清ふの本れる藤りあひ
うをまきくあり月の庭う那

千五百番哥合

後京極摂政

静のまはけうけいしやとやま
まののこつてうふりうの月

夫木

定家

たをねくこと板川のまをれさ
ふあふとあうらまは月う那

家集

夏夜曉月

仲正

ありそりけいさきまううたね
あてあり明の月候んううふ

詞 月そかふく 秋とまきこてあて
ありの明うやまを 神心清し 枝

はるるのつら葉のり 葉し 思ひ
あう。秋はかうし 夜よすし 思ひ
清あ。雲のつて ぼくまを 枝す 枝
さし明う 庭ふすし く 葉はを 明

安き。月を 経もささ 本れるもを
夕まみ。光りすし

連 文とね老しすし 夕月夜 昌叱

非 夏は月夜とすし 夕月夜 其角

狂 夕やまをさるるを交れ月 芭蕉

夕やまうくも 秋月うま 素桐

○夏の月かきしきうけと哥也
よむ事かきし月の影を霜と見
たて夏の霜とも云 白樂天

月照平砂夏夜霜 詩明歌集

唐詩選

李白

牀前看月光疑是地上霜

詩 七字對句

詩礎

涼月照枕款窓倦

水偏清

澄泉繞石泛觴遲

松下涼

山徑晚雲收織網

足涼風

水門涼月挂漁竿 孤月涼
コゲツスツル
スツキルス

夏曉 夜の明くことツクリ
△ 續後撰 定家

ぬれさうゆつあまをたあうあ
れのまにも似ぬあまをたあうあ

夏朝 夜明よもよも明て後も云
△ 秀 玉葉 雅有

あふらうははよのそいふげこんて
あふらうそいふげこんてあ

夫木 夏朝 為家

夏とあさそあさくはひまひま
ふとそあさくはひまひま

夏夕 △夏 秀 玉吟 俊頼
暮 松をふた涼する

浦人のをもあはれあはれそみちけり
蚊いあはれせいらはれあはれそみち

夏夜 △夫木 入道後撰
友の沈の汀よどり守

からし火の光も涼一タヤしの光
六百番哥合 後京極根政

うらぬの夏よりさねは明ぬえ
ふやうさす一あはれそ

同 夏夜短 定家
友のよいさうあはれあはれま

心もあはれあはれあはれあはれ
詞考りも涼。あまかすれい。を

のわら火蚊きう火風涼。あま
らふ福も夏はあまをたあうあ

月ものころの蚊の声。あまよりほ
非 友はあはれあはれあはれあはれ

夏夜五字對句

簟涼清露夜 山露侵衣潤
チンハスシセイロノヨ サシロオチイタクサ
山サケジニヨロモヌレル。

琴響碧天秋 江風捲簟涼
チンハヒクキチチアキ コリウフニキチチニヨ
カセヒキチチチキ上九

夏一時令 夏ノ四 詩礎

詩 夏夜七字對句

池邊命海憐風月 霰翠幃

浦古回船惜菱荷 水亭閑

詩 夏夜之詞 明揚慎

湘水魚鱗冷葦文 博山夷

篆罷鑪薰 魚ノオドルケシキヲ

坐愛金波洗火雲 月ニ對シ

夏山 龜山百首 子雄

夏山の志をこ本誌ふ高月とめてん

連交ふて海世思ん深ふうを絶巴

非 夏空かりひけり夏山のは車 風買

詩 夏山五字對句

山樹含斜日 秀木涵秀色

池風及早涼 奇峯出奇雲

詩 同七字對句 詩礎

幽谿鹿過苔還靜 夏雲端

深樹雲來鳥不知 冷溪山

夏野 里人 為尹

夏の志をこ本誌ふ高月とめてん

詞 卯の心 煙香 夏月 夏夜

非 夏山の笛を吹く夏野 一井

連 涉るる夏川 夏川 古今

涼いさ秋やかみひて初瀬川

ふの川世人の秋の心かき有家

俳月花梅けりくは美奈川夏暮
夏川の青い着るおる水着は重五

暑一△涼一 暑氣とくつ
六月小限

又同一事なり涼の哥連
能く六月の部北三十一日に出

夏草木 此部は夏三月は
こつとく木と記す

夏草 新古今 藤原元真
夏州の志のうはたり

玉錦の乃のりへもひるふみり
詞 志あふふさひをりくるぬ

かた山 山人の住家谷のけま野
草のそと瑞雪の庭くま茶ひ

を迷入庭かまふる人いあまを
ゆ弟志げの意落る藤原経俊

螢志げの風とく風ふるあ
あはのあとき 松子 松子もあは

合用虫 里人 結 松子

運 武義の夜と民の茶茶宗因

俳 交茶小舟とやめし橋のを思貫

夏木 △夏木立△若葉紅葉○結
若葉△嫩葉ゆのじ

玉葉集 院

とくて指さるるにありぬれ
松のふもせも別とさうら

俳 菱垣の結とんかうさ鉄山
玉松の形めり夏木とら 巖

詩 夏木五字對句

拂曙携清賞 緑樹溪邊合

被雲坐緑陰 清山郭外斜

詩 全七字對句 詩變

漠々水田飛白鷺 日月昏

ハルカキルサタラサキガトア

夏 草木
夏ノ六

陰々夏木轉黃鸝
僧院深

斜陽映閣山當水
樹松雲

微綠含風樹滿天
水殿開

詩 夏木之詞 唐 王昌齡

綠樹重陰蓋四隣
青苔日厚

自無塵
科

頭箕踞長松下
白眼看他世上

人 合夕人ノ外ハ文ヲ
松ノ下ニ我ニ居テ

夏柳
秋夕

柳 万葉にハ佐宿木花とあり

新勅 重政

林の樹をたもむ者ありはく

俳 林葉ハ虫豸とくさるる如し

青秦椒 色椒蜀椒○但州朝

甚美なり丹波丹後ハ其枝を

つと今丹波の朝倉と稱すと又奥

州津輕の産大がて氣味勝る

山椒小むせころ時の妙術 灰を

甜ふへ又男ふれハ女のゆふ女

ふれハ男のゆふととれハ忽ち治

まて藷草を移るるもよ

俳 初食本丸つふのまふ椒慶友

柚山椒 所々稀ハあり枝葉

山崖椒 葉大キ
細花をのき実ハ緑豆
味美なり

春葱さり初生針のふり
酢醬ハ和し生て食ふ

蚊之煙や塵妙移のさめ云 其用
狂はみあるもわらぬ人も生あくる
居りかたはにらりやうふべき 宗明

詩 蚊之詞 明 陳成

白鳥向炎時 嘗々 應若 饑 昼ハ
カクレテウヘ 進身 因暮 夜得 志入
テイルシムクヘモ入り来ルグ

簾帷 夜ハ已カ時ヲ得タリトシ
嘘吸吾方 困飛 賜汝 自嬉 吾等
ハ汝

風一朝至 倏忽 竟安之 秋風
フキキタラハスコノト
何処ヘカテニトイフナリ

蚊遣火 俊頼
あやりの煙ふあつことすも
あひのひのやきあふふら

詞 形を竹はね 結がさや 夜か
くまそふふゆ比 蚊のさむじ

せれタ白の たび様
非蚊を火やわつる方 非蚊を其角
狂蚊や火の巨燵の内か 非蚊を
春ぐつハ河のすんてい 非蚊を架柳

蚊柱 蚊の多く集む云 非蚊
柱ま 蚊のはちかがる 其角

蜻 蛚子。蝶子。山中。非 漢 漢の
唇 翹さふ知れてさのかき 台澤

蛭 水蛭ハ水中ニあり 草蛭
しつハ草味ニあり 草

蜂 蛭 蜂ハ形ヤ舩ニ 老 蜂
らふ胡やらる 老 蜂

螢 新螢。山螢。流螢。無名 丹
鳥。夜光。霄燭。丹良。

暉夜燐。夜半受。燭耀。

夫木 知家

井ののり風ふやうやうさるん

海までさへぬまのほゆめ

室治首 水邊堂 頼氏

くれわけの下の下ろきいじの

みくしりしりまのあつるす

家集 海辺堂 青捕

くぬ風ふるいくのまはけさゆりそ

ら海まぬあいやうさるけり

夫木 樹下堂 隆祐

とく河うそのやあさくせみ

くく秋かるとまじりけり

夫木 旅堂 俊頼

あつらふやうさるけのあつら

たつらふのこまをまたり

家集 螢火乱風 仲正

風わけのうらあつらふまわ

玉のひめつくよりのまじり

常盤井晋谷 螢照細流 仲正

友ののやと谷河をまじり

くは乃あつらふまの仲

家集 河辺見堂 好忠

むれ木のふもあつらふま

くくあつらふまのまじり

長久哥合 涑河堂 経信

いさう火の浪るまじり

そめつらふまのまじり

同 行路堂 経信

ゆくれぬほろすさるぬま

まよひやせはーあつの中

同 古寺堂 経信

今そあつその林乃あつら

そくぬまのまじり

夫木 螢火透簾 寂蓮

ますまのまじり

あつらふまのまじり

後拾 沢堂 公雄

花さのいさるあつ澤乃

まのまじり

玉葉 叢回堂 左大臣

吹をまのまじり

まのまじり

夫木 江虫 家長
かまこいぬあまし小井さねうへる
うらえのやふるぬそきいゆ

夫木 湊堂 光俊

日くらんと神の漆をゆくやう
こりぐみりいのかくやうあらん

家集 竹裏堂 讚岐

うらうけのよこふりあきさき
やうのたうけいあきあき

詞 歌ていびり。りゆ。かひい
あまのいぬけあけけあまの

らうき。月月ふきうら。曉うけ
うらうき。夕やあきうら。夕たの

風みりう。夜あきうら。うこま
の雲。よひの雲。あきうら。夜

さつてりゆ。きま井小行。その
上まていぬべく。雨あけいぬ

み月あ。あまのいぬ。あけまう
本誌 草 草とてき。あまのいぬ

茶葉いどう。若れあけいぬ
あまのいぬ。水草。あまのいぬ

あまのいぬ。あまのいぬ。あまのいぬ
あまのいぬ。あまのいぬ。あまのいぬ

あまのいぬ。あまのいぬ。あまのいぬ
あまのいぬ。あまのいぬ。あまのいぬ

あまのいぬ。あまのいぬ。あまのいぬ
あまのいぬ。あまのいぬ。あまのいぬ

あまのいぬ。あまのいぬ。あまのいぬ
あまのいぬ。あまのいぬ。あまのいぬ

あまのいぬ。あまのいぬ。あまのいぬ
あまのいぬ。あまのいぬ。あまのいぬ

あまのいぬ。あまのいぬ。あまのいぬ
あまのいぬ。あまのいぬ。あまのいぬ

あまのいぬ。あまのいぬ。あまのいぬ
あまのいぬ。あまのいぬ。あまのいぬ

狂者... 螢... 詩... 螢五字對句...
 狂者... 螢... 詩... 螢五字對句...
 狂者... 螢... 詩... 螢五字對句...
 狂者... 螢... 詩... 螢五字對句...
 狂者... 螢... 詩... 螢五字對句...
 狂者... 螢... 詩... 螢五字對句...
 狂者... 螢... 詩... 螢五字對句...
 狂者... 螢... 詩... 螢五字對句...
 狂者... 螢... 詩... 螢五字對句...
 狂者... 螢... 詩... 螢五字對句...

詩 七七字對句
 詩 礎
 詩 礎
 詩 礎
 詩 礎
 詩 礎
 詩 礎
 詩 礎
 詩 礎
 詩 礎
 詩 礎

水調揚花歌九曲 照前流
 江邊螢火入燕巢 水上多
 荒簷數蝶懸蛛網 弄琴畫
 空屋孤螢入燕巢 寄水流
 幸因腐草出敢近大陽飛
 足臨書卷時能點客衣
 隨風隔幕小帶雨傍林微
 清霜重飄零何處歸
 項ニハイフクヘ往
 ヤラレヌソ

螢火之詞 唐 杜甫

映水光難定 凌虛體自輕

水面ニモカゲツノ光イヅレノ処ニ定メ難ク虚ヲ凌ギ高クトヒユクツノ体自

然トカロレ 夜風吹不滅秋

露洗還明 風フケケ火ノ燈

却テ明光ヲ倍ス 向燭仍藏

燭投書更有情 火ニムカヘハ

少クカカリニテ書ヲヨムニハ 猶將

流亂影來此 傍簷楹 亂

影ノ簷クチヘ楹ニツフテウツルナリ

詩 全 唐 鄭谷

故國無心渡海湖 老禪方丈

倚中條 出テセシヲ子リテタル

深雨絕松堂 靜一點山螢照

寂寥 夜アメヤミ禪室ヘテラシ

事 故 螢

囊盛照書 博覽多識

ニシテ書ヲ讀フヲ好ム家貧

シテ常ニ油ヲ得ルヲ得ズ

夏ノ夜螢ヲ集メテ縮ノ囊

ニ入レ盛リテ昏ヲ照シテ讀ナ

ルト 務成子 螢

ナリ 為丸却矢 火丸ヲ製ス

漢ノ劉子南其方ヲ得テ調 合シテ佩ケルニアルトキ虜ト

戰フテ圍メレケルトキ矢ノ来 ルヲ雨ノ如クナリシカ劉子南カ

唐 李嘉祐

唐 李嘉祐

唐 李嘉祐

唐 李嘉祐

唐 李嘉祐

唐 李嘉祐

唐 李嘉祐

唐 李嘉祐

唐 李嘉祐

唐 李嘉祐

唐 李嘉祐

唐 李嘉祐

唐 李嘉祐

唐 李嘉祐

唐 李嘉祐

唐 李嘉祐

唐 李嘉祐

存ス一樽石ニ焼 鐵鐘柄入鐵處
兩半 燒焦 共ニ未ト為レ雞子黃丹

雄雞ノ冠一具ヲ以テ和シ搗リ千
下。丸シテ杏仁ノ如ク三角ニシテ

絳囊ニ五九ヲ盛テ左ノ臂ニ
帶テ從軍腰ノ中ニ繫レハ五

兵白又ヲ辟ク家戸ノ上ニ掛ケ
ヲケバ盜賊ヲ辟ク又能ク疾

病惡氣百鬼虎狼
蜂 蠆 諸毒ヲ治ス

試合

江州石山寺小あり此谷の螢常
の螢火又倍ニ毎年芒種五月の節
此後五日夏至の朝の後五日に
至リ十五日の間と盛リと守北ハ
橋をかきり東ハ川をかきりて
曾て外小あり此時節過る時
ハ宇治川又至る此所ハ夏至小
暑六月の間と盛リと然然共
瀬田の多き小志ウチ俗ハ
頼政の亡魂化して成と云々

夜

草化成虫

礼記

有書畫の

法

螢火虫 百枚 雲母石 二枚 共ハ
研リ末ク是を筆に以

ちて何ふてもいづと現さんと
思ハ画の上ニ搦るハ一次す

このまハ下月の内日の晩光リ
て現子十二次と云ハ一年の間光有

子子

蝸蠃 蝸蠃 赤虫 銀鬣虫
此虫化して蚊と成る

蝸牛

蝸牛 蝸蠃 蝸蠃 山蝸
蝸蠃 蝸蠃 土牛児

名ノ註 象蝸牛ハ売マツル
牛。蝸蠃ハ蝸ハ負ミ売トあへて

行心。蝸蠃売とひの如く
とへてなかりありくと云。山蝸

ハ山ニあり尺余ありのう
蝸蠃も売とてなすくゆく

夥あり。蝸蠃ハありくさ
ひこつりゆくていあるとド

マのぶくくあつていなり。上
牛ハ其のわらゆふなり

⑤ 夫木 寂蓮

牛乳子ふぬまらるる鹿のわらう
角のいれんとて身をまたのそ

⑥ 蝸牛角うらふよほしき蕉
百毒や角小目とらわらう嵐雪

⑦ 蛞蝓 附蝸 土蝸 鼻康蝸
蛞蝓螺 托胎蝸 陵蝸

○ 附蝸 土蝸 鼻康蝸
故の 蛞蝓螺も引つりゆくか

ちびくつん。鼻涕虫いふとるか
りの出さといふ。托胎蝸。陵蝸

いづれも文字の通つて

⑧ 蛞蝓の初来ふとら 蚊香移竹

夏鷹 長はく鷹もか小鷹
あり雲雀さく用也

鷹鳥屋籠 羽を替せん
たふ鳥屋へ故

ち置く四月 塀入の所又委一

⑨ 鵲 正字詳あり 大小の二
種あり 大さりのハ頂又

白き冠あり 小き
のハ此冠赤し 蠅虎 蠅子

蠅 蠅も各種類多し 中れ
赤頭と忌と 淵明が文を見り

⑩ 鶉 鶉飼 鶉舟 陸鶉
夜川 漁人 鶉小魚と

取せ未 嘸又下らる時其のを
せが則ち自ら出と 鶉けの

され 漁人の手おて 鶉を
魚を吐く又 妙なる 濃州 岐阜

至て 妙を得たる 漁人多し 一
度々 十四双を放つものあり

⑪ 新古今 前大僧正 慈圓

鶉飼 鶉舟 陸鶉 夜川 漁人 鶉小魚と

取せ未 嘸又下らる時其のを

せが則ち自ら出と 鶉けの

され 漁人の手おて 鶉を

魚を吐く又 妙なる 濃州 岐阜

至て 妙を得たる 漁人多し 一

度々 十四双を放つものあり

⑫ 新古今 前大僧正 慈圓

鶉飼 鶉舟 陸鶉 夜川 漁人 鶉小魚と

八十うら川の文書乃そく

同 齊蓮法師

うかいねえねえうさねえんや

造人進ゆくわう火のうさ

夫木 光俊

け川ぬ小夜うさゆじ桂人

うみいふんえんれ舟うさひえ

拾遺愚草 雨後鶴川 定家

草根 遠近鶴川 慈鎮

うら川のせでれまは本うさい舟

ありれえやうう桂のうま

詞 夜川 夜川の舟 夜川うさ 務

川うう火ういさうさうさ

えねえうさうさ 務川のうさ

わの舟 舟うさうさうさ

さう。教うう。波をさく。うう舟

せううく魚 務はううまいさう

うまいかつく務は子休。務は

あのみさ ところへうまのわう 夜川に

うねゆび。ううのさねはうさ

夜。目といふ。馬中。なまう。雲川

はうま合又いり。後。ほのうの雲。ほの

世をうぬ。務亦をう。うま。夕日

のうまを。月うさうさ

俳 務の舟。舟をうしてさうり 荷

物。ついで一里の舟。うの舟。其角

古灯。務は。清。務亦。舟。全

狂。務は。ほ。うの。地。獄。と。う。う

吞て。て。て。の。う。の。極。楽。 蘭室

青月鷺 蒼鷺。和名。と。と。と

通鴨 水鳥。凡。春。の。古。巢。は

残。ま。の。の。の。ありて。巢。とい

る。と。居。る。あり。これ。とい。い。さ。り

鮎 異名。年魚。細鱗魚。銀口魚。 夫木 衣笠内大臣

詞 松浦川、宇治川、五ノ白川、夏川、とや成、とるき成、沃水、いり成、水車、名、評、

非 山考の鯨、つる鮎、松浦、と、安成、

狂 はくし、し、の、せ、に、は、の、あ、れ、ん、

生 砂、と、も、又、あ、さ、ら、ふ、と、も、う、 満水、

鮎 日本紀神功皇后、肥、

梅豆羅國、と、今、松浦、と、い、誤、

胡鮓 ぶりの水鮓、潮、ひ、じ、

内、是、と、切、流、し、漬、ふ、り、と、も、

水 桶、水、と、も、き、へ、魚、盆、

へ、送、る、大、和、川、を、船、と、て、曳、乃、

る、この、故、水、も、も、い、と、い、う、

干 鱧 海鰻、十頭、つ、り、の、と、

干 鰻 非、お、と、よ、ぬ、腹、も、

魚 鱉 下、の、春、秋、春、と、委、

洗 鱸 川、に、在、り、の、と、佳、と、守、三、

夏 魚 軒、と、作、り、あ、ら、ひ、腐、え、

鮎 處、々、の、谷、川、に、あ、り、其、

鮎 鮎、鮎、と、い、ひ、と、い、訓、也、

鮎 和、州、吉、野、鮎、是、と、釣、瓶、鮎、

州 福、島、の、小、鮎、と、い、ひ、と、い、

引、田、今、庄、の、鮎、と、い、れ、等、

こ、の、名、物、乃、と、い、ひ、あり、

蟹鯁

鹽漬^シま^シつ^ルり^のなり
或^ハ酒又糟^ヲ漬^テも^可し

鹽鳥賊

異名^ト鱧魚。塩^レば^あの^いつ
々^ト干^シ鳥賊^ヲり^しる^とふ

夏雜

此部^ハ夏三^ノ月^ノ
種々^ノ雜事^トあり^し

短夜

明安夜^ト稱^ス今^ハ式^内觀^堂
窓^ハら^ハ竹^ノの^こそ^とふ

風の音^ハい^はく^て短^キさ^うた^らし^は夜^ノ
詞^ハく^さま^ハ明^安と^池の^江舟^火

夕園^庭蚊^ノ声^ハ月^ノが^うく^しは
連^ぬる^らん^ハ後^ハつ^まこ^トは^蚊宗^蚊

非^みず^くあ^やは^日蚊^帳
枕^ノの^あら^ハ梅^船蚊^帳。不^の家

蚊屋賣
非^望の^衆早^うの^とこ^ト蚊^帳ハ^流

母^ノ中^ト志^と扇
扇^ハ異^名氷^織
扇^ハ雪^雀。風^招涼^かい^{やう}。風^う州^たま^さ州[。]

新古今
忠岑

夏^とつ^るの^あら^とど^と秋^のあ^らと^あと

詞^ハ風^が入^る。月^が乾^く。夕^暮な^れ
ゆ^らら^る。子^はる^じ涼^し。子^はる^は涼^し

秋^ノの^扇。ま^ま秋^のあ^らぬ[。]雷^の文[。]
月^のあ^らさ^す。袖^の月[。]夏^の秋[。]袂^ハ

夏^抄と^るん

連^松風^もり^のい^はさ^む扇^ハ宗^祇

非^心風^と傍^はは^さる^扇子^ハ宗^祇

狂^ハ不^ある^いの^扇と^かた^とこ^と
り^の白^地の^あら^まし^るの[。]ト^養

詩 扇五字對句

掩^笑須^歌扇^中散^詩傳^画

迎^歌作^弄絃^將軍^扇賣^書

詩 今七字對句 詩礎

流風入坐飄歌扇 扇影飄

瀑水當階澣舞衣 逐酒來

勻粉時交合歡扇 共徘徊

追杯乍舉石榴裙 涼風前

伏翼 扇の翼を蝙蝠に見て

草子かきたふく清少納言の枕

あ去筆のかかりとかけり

團扇 非 夜の客居のたぐ

思ひを菴のうらまの那十

狂ひかきたるの都はたうら

まのうらまの都はたうら

詩團扇之詞 唐 劉禹錫

團扇復團扇奉君清暑殿

不 相 見 秋風吹庭樹從此

不 相 見 上 有 衆

獨 女 蒼 々 華 蟲 編 明 年 入 懷

袖 別 是 机 中 練

日 傘

編 笠

結 夏

夏 斷

夏 經 夏 花 夏 書

も夏はまりの内行状をり夏
りの内ハ佛の花を供無縁のじ靈面
向又聖經の類を書寫せ俗家
も夏断つて房事酒肉等慎む

者あり△安居といふ形心靜攝
以安といふ要期此に住まふと居
新麥 早きことの八三月此ま
れそ記物ハ五月の内出

切麥 △冷麥。天寒の時
ハ温鈍をりらひ大

熱の節ハ冷麥成りらぬ
制ハある。寒温の違ひの

者冷 △冷汁。夏の食物又
ハ汁も器へ入

井水ハはあねたささひへ
たささ記食ふにさささ云

麥飯 狂おけりてる位は
さささ全麥種ハさささ

麥粉 非 粒くの汗をさささ
麥粉の那 十六

木布 布のいさささささ
のいささささささ

單物 △汗衫 官家の下
着といつる

或ハ袖もささささささ俗
ふハ襦袢乃たさささ

汗巾 △汗拭 △汗手拭 汗
をぬくハ手巾なり又

夏の用具といつる
非 ちハ手巾さささささ

必用 此部ハ夏三月の入
用の事と数多あつ

夏養生 素問云夏三月ハ蕃秀
と云天地の氣交リ萬

物發茂と夜ハ則ハ早ハ起志
怒ハ事ハく英花とてさささ

天氣とささささ得てささ
夏ハ氣の應じら處ナリ養生の道

○水ハのこ水ハ洗浴と事とさ
つさ石の上ハ坐卧ささ熱とさ

生下公の礼の社を生す。○風は暑中て
財にさうれ風痺等の病を生じ

夏天氣

日蝕黃赤の雨多き公ま
○月暈赤の多き風ま

夏風

夏風の中を吹萬物て長養
○夏の火火生土と

土て生さる土中央の位方角はと
つと干支まよひ成未の方と俗に

五月西の西風と雨とすのの時
節の火氣より火生土の土の方へ生て

吹風をこと以て○東風は常は雨ま
さくも入梅の中土用の雨ま

然るもスリ吹つきて風西の雨
まら○南風の時の火と對する故雨

夏雲

風の方位ままがひて
雨とあま

夏霞

暮は西の方赤くして
南へ廻ると日和と秋

小いりして西より北まらる

